

遠
門號 2510
6-5



太田道灌雄飛錄卷之五

目錄

- 一 景春同黨の者韓起附り道灌西の城を攻落す。
- 一 豊後重員山所方へ属し附り道灌武州浅茅ヶ原軍の手
- 一道灌武州古田軍附り敵兵敗軍の手
- 一 景春上杉勢と武州用土原軍附り道灌謀を破る。
- 一 長尾季泰所方へ陣參の手
- 一 あ上杉季泰北武能對陣附り成氏上杉と和平の手

一道灌武州小机軍附り景春敗軍のより

一道灌相州奥三保軍附り海老名や間討死のより

一道灌東武巡見毛小日向金別寺市谷八幡宮のより

附り山吹の里のより

太田道灌雄飛錄卷之五

東都 木村梅幸志貞編緝

○景春同意の者蜂起附立道灌所の城を攻落す事
ゆゑとおもて尾まち一味の軍而て小峰起くよ放と亡ふと。先武藏國
豊嶋郡の役人をも得助解由を湯門尉。固守平右湯門尉ハ同郡石神井。諏馬
の城とおもて在土と川越の通信とあつて勢七百隊弱出で捕らる。相州あき
京もと被官の者溝呂木の城と倚く要害城かまく。城後のみ辱室布の小城乃
し城よ難と今ま拂却助へ小次の城小兵が集らる。武元相馬又一つの城を
ありみなるを因入通道は此由と聞く。棄てゆり。半うきべかくも警く
氣をもがく。扇ぐ谷へ遣つて軍勢を招ひ。子代田を狭さと城と残し。
寛田源八弟齋藤加賀守を先陣として溝呂木の城を攻かる。城をもと野間附せ之

と防ぎたるが、あるへき道灌より追退び引退ふあり。と攻め入るす。
 ちうちうち據て乗破しれ。抜けく小落えにて為城よおひられべまゝく。すよ
 小破の要害よかへきて。四方より攻め敵も流石ふ名威歟。一月をどん
 残えゝがれもかまふをあよ入て城と云ふ。大將を布陣すを陣參を道灌へ
 人馬の疲労と慰め。又ト次のはへ向むと。すも此所へ究竟の打合を。
 猪の巣立自在あしもと。ほよ金子掃部助。武勇の古志さうる。民屋と毀
 て擣とうへ塙と塗丈木大石破損悉く。故遠くとて待つる。通法番
 時河戸の城み。吉田房書助。上田よせみくびふね山鹿と称り。往生虫と秋
 开かず浦朝昌。二浦義同。千葉二郎自闇と。子代田少加勢と。蘇我
 や源よ来まく巡見し。げ城力攻よあそとむのまを多く撃ます。先其砲を
 と避く。遠巻よせまと体うすやうに退く。向い陣をとみうる。残る小集

主が一味の者。吉里官房を傷し。宝相寺を始めとして。お次の中の後信乃。な等。
 横山よりすと。出國府中より陣を立。小山田の城を攻め。矢野吉庫助
 とまねとして。山越の城を押さえと。曲林とり。所小牛助と。これとこそ所誠
 乃傳よこり。す。吉田園吉助資忠。上田上野を守。延ちうさんとす。矢野
 吉庫助も小れのきのじゆと。一まかう。猪夷らしく。ふかへゆきと。其備唯
 一重あり。ち田と田へ二まこと。先陣をまく。兵の頃。横谷城に入きて突
 破さんと。よ田と野に三百騎旅の手代す。めで。死されば。天せも精毛の討
 がれへ。とぐれ射か。よ田へ襲と弱く。今新一丁をうり退け。天野
 庫助が軍勢とも備ぞれ。て追來る。財をひそと。二陣ふむえ。と田園が
 助。故陣のらぬの方より。あひだす。毎三よ突て入る。よ田も。世よて逐。一會せ。た
 すあり。まきされば。きせろ。お軽度をじきひ。接觸強ぐと。吉田。よ田八方す

り。食ふで一人も済まさずあつた。まよろはし。ひるも勇力ある矢野三郎助。小れの
寧むかしごくもお頃て。ちよこの辯わざうを退く。お角。よ因へひ由道清下遣
又川越へ帰ゆる。

又川越へ帰ゆる。

○豊鷦重貞は所方へ屬り。附り通達武忍流等が系軍の事
爰又武忍流の者也。故の住人よ。豊鷦重貞といふ者あり。彼ハ平氏の
一族也。と。總念附代より名前取つて。人もかくする勇士あり。代々扇が谷ふ
ちびひて。此二の味方す。右の侍所より。あくと縣にかかる。是もゆゑ。總
小定正を能き。仰ての方とねり。左云々を窺ひ。侍所勢となり出さんと。さう。
其事脱よ。死ぬ。死ぬうきれを。道達ゆゑく。我が居候邊。近々。小敵続と。うへ
みゆく。びとく。ゆゆの城を。抑えを。強し。一戦。よ。あたるべーと。七百。ま弱を
徒々。真乳。お出張。も。ま。勝。彦の布重貞も。一族。お。従え。百余。人。おまも

同トく後茅ヶ原へと向ひ。ち面道達の歎矣思ひの外小勢よりと斥
候の者乃やまよろしくて平場へかへり。追え近づくをもと、捨便の
敵付する族とまもとよまざり。總士衆アリて七百余騎。喬象の濟を衝く大馬
と渡る。とくまの本地小鹿川。通達魔と振く下知されば。兵士熟虎の勇威
あくをもが勢よ突てて。ふきみ部。まもとも自まの先小退く。又勢と戦ひ
カ義さと元来殺妻の戰傷よ後見とおもがる。ち面道達の急。ま先を碎き、
擣えよ。ま自ら。廻民者どももとよれ。もうち。廉濱今ハ櫻の多アリ。逐退く。重
負ハ齒噛をあしらひ。黒髮うね者どもあれ。妙所と道くとも食へ限す。ある
りのとあくよ怒り。逃る。萬方の目もかげ。家のみ。舊代の名。争ふ。たぶ
ふお後。備ふ中軍小弛へと。を面入道よ。總もと。切ども射もと。もせば。
素もく進ま。まと。ふ。宝田源八郎。け形勢を。るよも。一文字も。

事あ付て。さしにやをもあ廢あうこうと付てかる。重貞完爾とあり。ひ
日比の朋友今古へ入彦あゆが修羅の敵をもとめて切むと。至彦が主導
ハ此ノ彼度ニ隔てられ。主貞は縁く味方も行はざれども。彦あゆが源八郎へ
よ候下候ともす。面倒ねりひき細んとちうとからまく投捨て。細ひと
かく多くあるが圓ほどどう。彦う。をも序へせゆる勇士あきども。戦ひ方
殊のものも或は被き。或は病夫せひぬも知ふとさりされば。道徳則をも存
意を知り。付る首級八十九級。山の宿ばかり。徳國公格行
ひ在土へ凱陣。さりき。

○道徳正則江古田合戦附。赤猿。赤猿。板橋等役軍の手

ちく又。尾東までかづなを一歩。勝利勘解由。尾門。宝慶同。平

久里の尉室羽。文明九年四月半。清芳が家少て付死。そを漏。主家が一
族あり。しが渠の清所方と。城主の。其合戦。ゆも。生々とて。居たりし。
泰み。希が。城主を。命。ゆ。ありひ。平左衛門の。主。勝。那平。協。赤城。と。おも。
合戦の用意。す。ま。き。四月十二日。道徳。在土。うち。行。出。平協の。城。攻。攻。
せ。く。城外。を。放。火。て。ゆ。る。平左衛門。ゆ。く。道徳。一。え。退。き。る。ま
て。夷勢。と。城。一。ほん。と。き。の。主。ゆ。く。と。兄。勘定。主。五。櫻。門。か。勢。の。主。
と。ね。み。と。く。重。廣。聞。届。て。石。神。井。諫。る。乃。兵。主。次。役。人。板橋。赤猿。の。一。族。戎
を。よ。ゆ。じ。其。勢。七。百。金。部。か。く。うち。ゆ。る。平左衛門。尉。室。羽。も。三。百。余。兵。と。く。
卒。一。く。勢。力。か。く。か。く。う。る。主。入。通。れ。と。安。く。よ。お。刑。犯。か。捕。朝。昌。千。葉。分
自。浦。と。た。右。主。使。人。同。那。江。古。田。の。系。源。代。と。く。ひ。み。人。駆。向。と。く。勢。千。猪。ゆ。く
ゆ。く。さ。う。き。う。そ。の。日。暮。暮。よ。か。び。夕。と。バ。合。戦。ま。明。日。互。よ。陣。所。小。翁。戎

禁よまきを放はす。乃のる番ばんを立たてどかかくて明めいめだ。十日月の軍ぐんをあ陣じん用もちこすや。
矢や合あせの縮すく兵へいを射ひてる程ほどこそわれ。全ぜん敵てきをももしりて撃うち。矢やを放はしてた
れ。まくら。馬ばの腰こしを戮いたひ。疲つかひをと。二陣じんよ攘さげまて。頸くびと引ひき。を因いんが先さき陣じん上
おも千葉せんぱ山渡さんりくへむる。身みよ荒あら兵へいの軍ぐんをども。手てもとよく。擧そぎて被はふ。軍ぐんく
声こゑを揚あげて。勢ぜいあくよ。財たくわくと。南道なん道どう澗せき。宋配そんを據すくて。先さき刻く
ほほひよ。將卒しょうを。得とよく。引ひ捉とけて。投なげ擣う。赤塚あかが郭郭伍ごを切きて。今いま轍わを。辛から
を。あが勇いさ士しを攻うめ。せき。瘦やせじその處ところへ。南なん方ほうを。あく。あれハ病びりう
り。北きた崩くず。かく。とく。を。死し。兄え牛うしを。まきて。二に陣じん破はす。ものさく。再なり。返かと。翻ひ
あふ。さく。板いた持も。赤あか旗はた行ゆ。もとと。大お事ことよ。糸いとを。中なかゆも。也よ爲ため。平ひら左さ衛え門もん
ち。波な草くさの縫ぬよ。白しろ星ほしの冒あ。まよ。こ。そ。を。う。ある。陣じん刀と。真ま大だい甲こうに。やく。か。ま。
一いま。か。お。て。ひ。取と。獲と。う。せ。あ。り。返か。う。て。ひ。と。ゆ。る。高たか。形かたち勢せい。唯ま。霧きり靄くもの閃ひく。が。く。

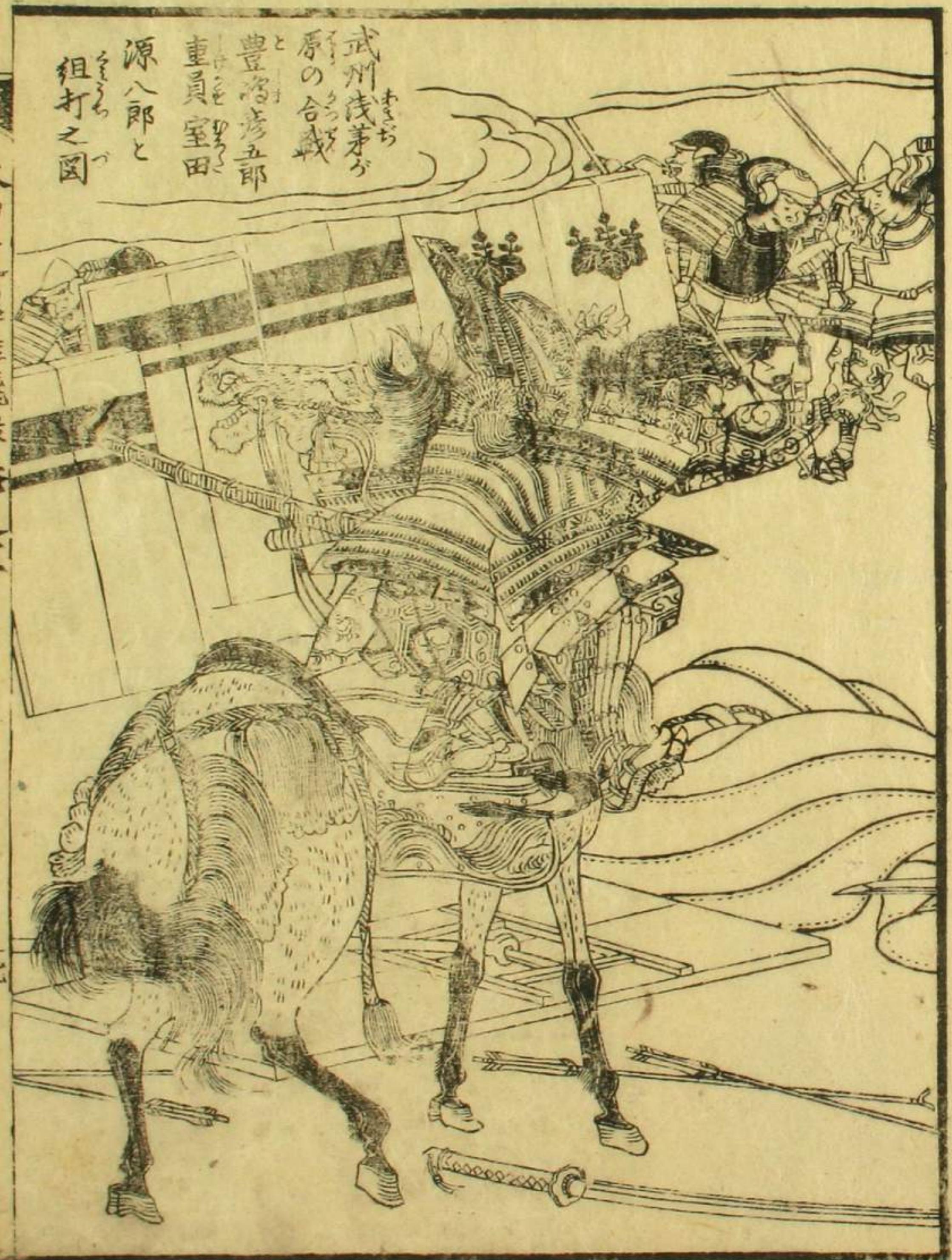
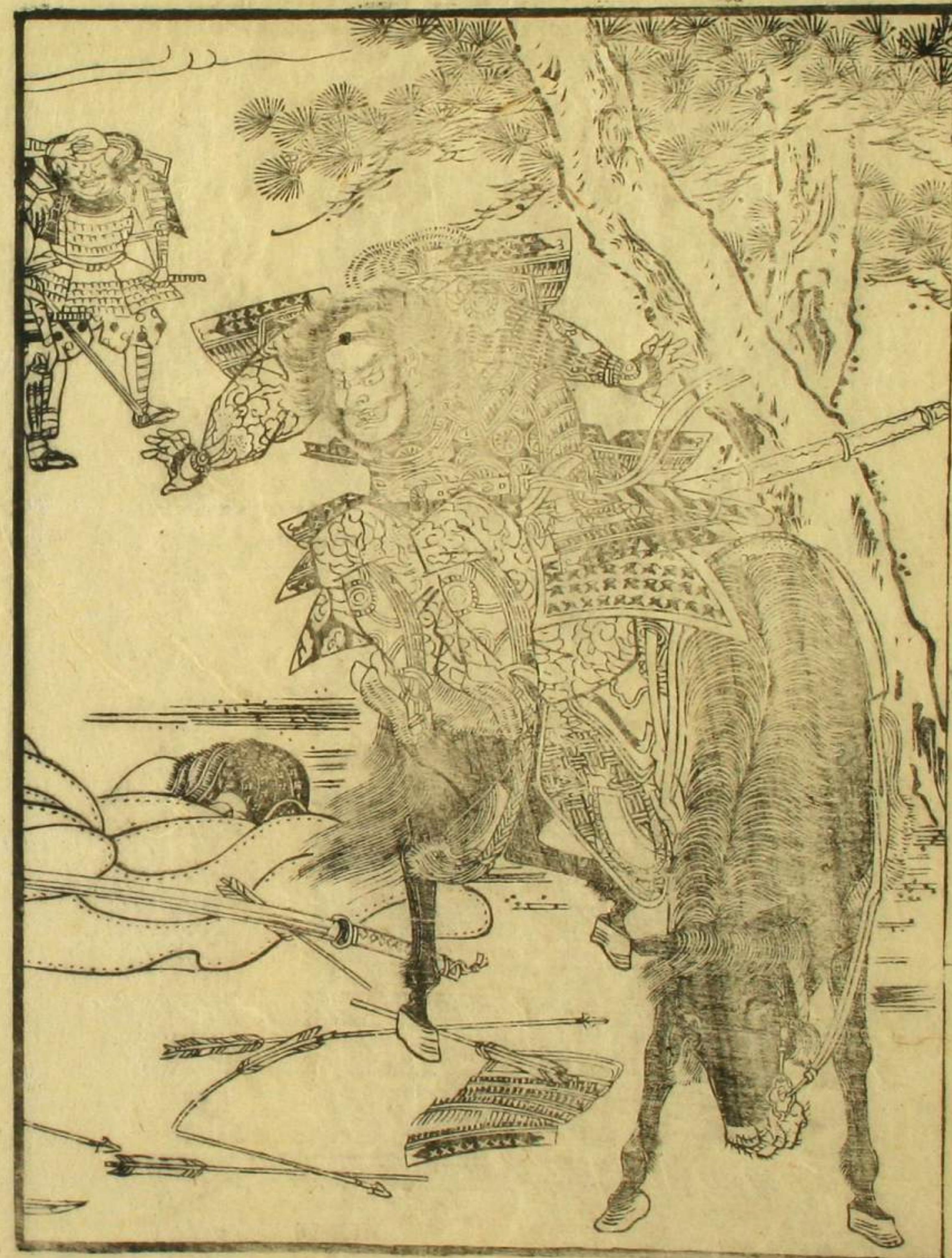
えりあらひをもとめかへば十七人まであればと。ひふ雪ひ、圓流がち率一ども。
まぐれと構はきて陣内向きてうまうらる。もの多く自流ひおよ撃り敵一人乃至
か死く。腰を下すて身をかわる。つて自流うけ多く波をよしとせんぞと
もう少くのまがむる圓流をも強こわい。自流うるるよ猛烈に。十数人、うづび
りあがり矢をとたよゆく放く。平を矢が胸ぬよ背巻をかゝ、射こゝくもぐ。
るより下へまうじき。腰を守る首襟ゆくゆく。ちゆるがお主大將を
けりまく。もみちあく迎そく。お面の尚もさ奉と屬す。後ふねて追
討き。放擣あゆのものたも所くわく返し。今を當るとあらえとアーチ程よ
せ彼ゑみて付近を。廻すめうち三軍と。娘り付ける者を尋ねば。おもむ
亦娘放擣が奴かへり。百半人を紀。もむかふ人のを付属させり
元月十五日神井の陣よやーあて。モニモマダリタセ。取引の事あて。おこ

居て往くも皆虜かされば防ぐを便もあく降と乞ひて同十六日午前敵
を對面と遂に大要害破却せんとすとも内へては破せずと密々
裏心と候くと聞く。同月十九日攻めどんを爲め西門重廣より
後度の行とや復々向まくも唐突で云々。

○景春よ秋勢と武州用土原軍附ノ道灌謀まもと破る事

又金子掃部助らをも小澤の城へ先日押えのをひいて此
物勢のふ段落せど同月の禁と秋をも後へ小次乃城へと向ひたる金子
掃部助忠也も主勢と引異一隊十数人を出焉からず。至田少弔先
来じて。一歩もと引退く然とりども通達。かくの後成程や。今小
城よお詫さぬ。猪麻行革とおつえ番もほふせある故に法圓ナ御理
まと金子の抜けをもす。猪木とも實うるべべく範故なづく

或夜忠がやふ意をもうを因へて兵とよりかある事ととひねれ候
つもと明垂く嚴しくも追ひてうけよ。おと尾張を方へ因のをも
あくと金子をも上別勢と僅促して武兵五十人極徳とひて猪
押出で陣をも。そこそき因へ道を備へ向の所の缺をも取へ行を立て候
所の城と攻めとして。上支那城の虎へひて。およ秋半途へ立て九年
八月二日利根川をも越へてまたと我らと六十人ほ満可へやくよき勢
兵のをも金子も尾のを以て敵を殺へて満可へて猪
へを因へて道をも尾張をも忠と東北食をも濃山をも集め候うて
忠の三万騎精銳をもてて。おともと金子をもとす。おともと金子をも
駿河のちよと金子をもとす。今あよ秋の軍が行へ知徳の下三面
のをも行軍のれり我らも合戰頗難あるべし。上支那の兵も其のをも



さしより。殺す人の人余越えと。そへ進むと好まうれば。よれをとて近破くべ。の
條もひそひと進往一人きり。先鋒後軍とく崩れからべ。進往も列伍
おれといふともすすまへ。あらびに。大軍の靡きくる敵あれば。號令
おれいぞと陣中渥新せんを。所紙。味方へ心と一致す。實てのるもの
あし。猪子を得。隼瞬くうちうへきと。ニテ。と田紙を右小使。自縛る
既退。紙をとぐ。只一擲よ。紙をさんと。よく。紙をそぐべ。幕直ひすて。する。
通達の則。富多の先陣ありしへ。是非今夕へ急ぎ。紙をかんと。をめと。し。
此所へ。歩ゆる。と。齊藤か賀。守と。宮田源八郎。五百百番務を解て。近村は隣
おき。合戻の頃。ふうち。かくと。あ。食せ。又。板食。急流を。呼び。ヤク。足下
よ。秋家。の。旌旗。と。先へ。進み。り。と。弱く。と。食。新。ひ。鷺。蘿。ひ。か。久。備
アリ。退き。よ。本陣の。貝ち。鼓。と。聞。六一度。よ。多く。返。一。儀。無。し。一。も。ふ。さ。り

て切崩すべと。命令。我が備へ。雨上板の先へ。繰り。て。板倉が後二丁を。引
下す。と。押す。と。時。文明十年戊戌五月十日。寡。寧。雨の天。や。く。長。城。雪。向。城
浦。朝陽。ほ。ま。と。そ。く。と。か。と。長尾景春が先隊三戸。と。田の。あ。將。今
板食。急濃。守。と。板の。旌。と。見る。う。も。行。く。サ。ー。も。撫。父。モ
御。紅。束。腰。紙。す。折。り。て。か。と。く。く。下。被。され。を。長尾が。勢。軍。一。回。よ。板食。が。備
よ。切。く。繕。る。と。湯。も。ひ。と。少。時。が。圓。や。う。と。そ。え。る。が。忽。よ。追。ひ。れ。と。二。陣。八
方。あ。ざ。れ。か。ふ。も。尾。景。春。こ。と。と。上。板。の。先。陣。の。破。れ。と。き。け。圓。を。途
さ。と。旗。半。よ。衝。く。と。よ。板。食。と。は。え。と。さ。率。と。下。か。一。板。食。が。後。小。迎。て。追。ひ。く。
通。達。の。先。鋒。ち。り。見。物。と。く。居。じ。と。意。ま。と。と。不。遙。と。伏。き。の。場。を。あ。ら。む。と
ス。る。と。か。く。食。國。の。狼。烟。紙。よ。行。く。と。る。と。煙。像。く。と。雲。よ。冲。と。と。之。の。れ
太。時。と。あ。き。と。寶。田。齊。藤。二。も。か。り。れ。て。ま。も。グ。竹。を。交。切。り。す。て。を。る。わ。り。ひ。

うけね事あきだ。毛尾ヶ車率團軍し。りじろよ敵あり。返りとひようちり。
あぶれへ被金を旋轍を以て見とせきを破とせば。被金を流せたる方。
安田、秋谷へ右の方より。京を以て包み被云急よ責むる。あまくねの後のは
道めがねよ乘。かくわく。後陣よりざんくふ退ひと人殺と婦人とあせりども。
あ後四方よ敵と衝。祁伍私かく戦さんとさるわあく。悉く敗軍を。京を
是をもととす。今へ運の究あく。け跡を付せさんと身縊ひととお。前
三戸大口のふきてある。こゝに正義をよひす。當面の難とち庫助
修かくれ。早く辨形(ほんけい)をす。あきらめかくつて疋とどまりて敵を防ぐ。
上田云庫助もあくあつて死あり。おぼさかれるゆ勢はよみゆく。もうまも
多くひを負ひ。かくとおとせよ敵をひまわく。返り合を。敵退けざる代
あえと酒を向ひ。酒を。毛尾ヶ車率團軍を。あきらかにまちのひきしやと練教へこそ

駿城より是れ好んで二万枚の着到あし
着丈さて千騎ゆへりびりきよ。

駿城より是を好ひへ二万騎の着到あし。鉢形アビヒシハ軍を悉
きも、さて千騎、火足、びりとす。
○長尾景春。御所方へ降参の事
長尾景春ハ剛ち柔の一戦より負ひ。鉢形よ逃げ。あよ秋尚^{秋尚}と馳向
とまく。歌^歌ふ。よら詫^詫せんとちよ怖^怖きくえりが。
二戸駆ゆ。よ因^因をすか須^須べそうとヤキス。嘯^嘯方へ一回のま武者^{武者}と。君
殿軍のうへやよねうへ^あぐまんば。歌^歌ひ^ひ氣^氣より多勢あるべ。ば城壁^{城壁}
えを通^通繋^繋きる所あき。安^安否^否かく。かくろ忽^忽ふ攻^攻めふ必^必定
あり。臣^臣ふつ^つく思^思ふを迫^迫ひよ。今古河^{古河}の市内^{市内}千葉ふちをといども。
山鹿^{山鹿}の駒^駒。轍^轍魚^魚の水^水よ喘^喘く。まことどら^{まことどら}大^大國^國のまあり。け
勅^勅をすくあるの罪^罪科^科と定^定べ。今も^も二の志^志と改^改し。成氏^{成氏}を^を元^元の如く

孫全之ゆきへとまんとまよせば東國をさびゆくの始りあり。内
奸密す。あまんと後赤所の内合戦をまめ。内侍方の者がほく。あよ教
と教ひ。事へ牛角やあく姫経と連り窮途よりはまく。何のふぬじき。
教のゆけぬものまよ。軍へ内合せ。かのうと傳め。まよますあらち此
計ふ。徑へと田舎庫附ともつて使節と。千葉へ遣へ。成氏の近臣菊田
中務が輔政時よりまそ。あゆ言ふやびる。成氏は豊嶋が一族敗軍の後へ
孫山を苦へりらむかせ。入る國へとねくち尾が軍をひしきべ。分れ
一方へせび一方へ弱り。其弊よきてまよどあまんと糧足ばず。軍ちが
招くとまよふ。事まよう使者はまくと嘆きよ屬せんとやうじふ。せゑ
如何のんと傳ね。兵事りて往來ゆ。その附桂陳孤羽扇が進みをやす。
景春の慎まよらう。もと叛きて敵とたうへる。竹拙く才薄く

太田道灌小對揚まよ。されどそーしん大軍をひまくふねば。一戰に
と失ひ。勢ひ屈して拵形を遁る。是追退谷ある時。まわく陣と
まよ。浦所ゆも彼が凶悪を恩免あり。先年とてよ役を退治。りゆ。
事まよ甚ひ。憂憐と感して。心を盡さん半勿論あり。又「みへまよ」と
いふと聞え。ば。地氣りのもまよ。責以味方の爲よ大なる利て
こそりと。悔るをもあく。然る。族とぞじめの業の者どもそくかの
徳ぬも最と固ひ。て。まよが歎仰。がまよへあく。危難の転も既止が
き。仍てあく氣ゆ免ゆ。自らくびて内加勢すらへ遣へ。まよと。作
知らぬをも。よ。内合庫附ちゆく。けぬもひき。抜き縫と。まよ大ふ脱び
廻文。まよと。武藏の者どもへ觸れ。もふ。浦所の内合伏書のき。されど
入まよ。同様のものもあつて。内合伏すうち。もんと。甚く用意とども

卷之三

○西上村。昌春と北武藏對陣。附り成氏、上村と和平の事
かくとあよね。出撃^{こつき}は抜さざるを付かんと。又と野、武藏の勢と遣
き道^{みち}をば篠^{しの}倉^{くら}の間^まより殊^{こと}。北武藏の富田^{とみた}四^よ方^が田^たをみすかす。甘稻^{あまいな}あふ
陣^{じん}を立^たまふ。あまもんかひてきう。成氏へか勢力の半^{はん}以下^げをば軍^{ぐん}を立^た
わ總^{ぜつ}の千葉^{ちば}へ往^{むか}せ。總^{ぜつ}に日本七^{しち}月^{つき}より結^{ゆく}城^{じゆ}中^{なか}勢^ぜを補^ほ城^{じゆ}相^あ。那^な
須^す修理^りをま^だ資^し房^{ぼう}を先^さ陣^{じん}。接^{せき}處^し篠^{しの}倉^{くら}を始^{はじ}ら^として。下^し總^{ぜつ}。下^し
緒^{しょ}の軍^{ぐん}士^し都^とくみの能^の強^{きよ}。激^{げき}とりて而^とも生^お死^死ととく。とくあくまくが能^の。長^な
尾^びちをや薦^{あらわ}系^く。兄^おの意^いを敵^{てき}もんと。哉^め後の國^{くに}二千^{にせん}騎^けと率^{そつ}して。主^{しゆ}をと
懲^め。令^めを荒^{あら}巻^{まき}とりて不^ふまともあやうり。あよねいとをとめて。仰^{あお}せぬ勢^ぜ。^{まろ}まろ^とえ

當所をもりて。上列向井へ歸りてかまひて大勢を催し。令戰ふやびと陣拂
して向井へとぞ引退。而めよれとれ従ひてよりの懸念の多強と軍城
壁を守る。もまへぬ陣せきをう。その年も脱ふ事にて。明永を文明十一年己亥
正月。汝氏より築高中移す。浦を守て。よれへ也使きて。後の大日是年で。宣教
乃廟戦を止め。而れ後あづとの事あり。よれも如何せんと先道達を招
き裏見と向見と名ふ。道達はもとより廣宗ともいふ也。お
彼より傳承ふもあり。がくじて。毛東園養年。の兆ありとやもふよう。則
ゆ復ふゆうせんと頗る。あよれよりも尾尾張守忠義がりて。信
士がくじ。ひかわも。既出斜ら。まもがうべ。尾上野坂と曰はれて。
あよれと。山本。そのひぬ。ゆうべ早く。人數とりて。食糞と止む。の年
ある。まもが。まもが。まもが。憇ざざれども。是耶。かく又。糞取て。御糞をり。

○道徳武州小机軍。附モ象徳加勢候軍の事

○道清武州小机軍。附了家主加勢旅軍の事
さるやど承所管領和早領ひりか、扇谷の定西道清はひて。よ野の
念が野より四月廿四日河越の城を破りて敵を殺す。世よ又武州神井の瀧溝乃
時より移る。敵を殺す。敵を殺す。敵を殺す。敵を殺す。敵を殺す。敵を殺す。
す。敵を殺す。敵を殺す。敵を殺す。敵を殺す。敵を殺す。敵を殺す。敵を殺す。
固國橋樹郡。小机の城を小机彈正左衛門。島安へ。卷二の家主方されば。こまぐ
まのみて。丸みの塔。大倉。強と弱。が。能。ア。ま。よ。弱。金。能。と。弱。能。
乃。能。能。と。弱。金。ア。ま。よ。弱。金。能。能。と。弱。能。
た。う。ん。と。ま。く。弱。弱。斧。城。捕。よ。も。く。と。と。を。向。入。逃。と。先。陣。と。く。の。越
を。知。陣。す。小机。を。の。も。ど。も。け。旨。あ。ま。く。渡。れ。か。勢。を。ぞ。戦。り。き。ま。
も。尾。氣。ま。え。ニ。テ。渡。れ。る。ち。里。官。敵。を。奮。門。エ。ト。と。車。大。石。渡。河。ち。う。こ

りくる多磨郡。一の宮の城へ着陣。と。少前の後緒せんとし。同年二月十日
よ前の大先陣。ち田道澄殿より少前の城邊へ寄りうりくる。あまちへ少前り
立城せんけきの者。ももみかね敵へあくしん後陣の勢の来しきるもるよ。
ち田は後より責をうへ。隊中うちもすて生え。その時を後より接と
少勢の入邊を行ふ。其勢をよ陣觸と拂喧よかと。道澄の
室の勢を除そろへて。もじゆらべ。二のまの抑えめ密函源
ハ多が強。りきを。多生ばよ少うりくる。も尾をあまうへけねるととくと
まき。後勢のまみ内と。多勢とたのま。敵よ證を合せとつと。ゲセ
うれぐ。あひの仄くとひ。うる頃わひよ。道澄がおりりへ立つる。十所をうり
みて。本くらきる。ち田ヶ家屋。齋藤が守後陣かあり。が達ふ流のうよ
馬埋立のぢり。多勢の馳ある。をうと。と。多勢の馳ある。をうと。と。多勢の馳ある。



畠道満の末弟
同國書助資忠

吉田三郎之盛と
男戦の圖

方より馬旗數々と大勢押ある形勢。而ての内勢と云れば、
是ふうそぞくへくいとづと敵兵のあるふぞくんとやらる道灌まかわら
小あた所よあよ上げて是とそれを齋藤がやもよ達ひてや義姫の敵も
見ゆるをうそ見ゆる長尾宗景が後づよぬけてまう城兵をも包んでともる
伏兼う道灌余くとえの所へお戻り。宗景ゆくても此謀から
けり。かくえちがひりく敵大軍みて嘆息へかおうう小さく又歎く
ごこし。是といきはらん道灌がりよく若くおみがわゆる者へ皆の多め
よ候とぞ。豈勢ひよあらん事へ要らぬあまえようぬの意う。い
を多勢とお揮とさざ。一矢の仇あくべく是令行るべく。我おれ行我かま
跡のやうすきよ体あ。音乞ひ一ふあ。我ダ奉配み候ひて必中必ず
きあ。ああ、先手をあきて宗景が軍陣へ而もうち切ひし敵大軍居一撃く
まくとけうりとく

分とくれ。本陣と敵りんも人馬嵩て。その働き自在うます。味方へ本
陣をあらひ明さん。備前とて移動せん。まことに体をあてかひとむ。宗景も
体破りのうべ度城失ひく敗をとく。我今戦をよ併諸の哥よもまう。
まくとけうりとく

小机も先を習のはじあふりはにほんとらうとある
ものかとと參配せふま。軍士とてふ國をとす。兜の櫛と頑げ道
の袖とげり合せ。氣もと先兵の中へま一丈も馳かる氣もと車と廻り。
敵へ十歩かぞりつんで付とれと。東西へあ上り南北へ近通ひて。進むとと車られ
を。軍卒れのく籠ひう。道灌とてと進むとと車とども。ひとより入道の
機小鎗と対ふ應ざる。神牛鬼漫の良將もと。敵破らんとそれば魚鱗
小進み。圍まんとすとば鶴翼つよ聞き。一度四度掠食。ども。兵士一人も

さう。おまかせ。速敵ふ。あらへ。あそか。も尾も付く。とつてえふる
西。黒糸の道。鳥帽子形の留衣。粉毛の。あよ。あとも。毛者。徒紹と合ひ
馳。あり。と。事。ふい。笠。毛。後。是。重官。肩。ちあ。が。身。ふ。立。之。登。と。す。ま。の。下。
ゆき。あ。ぐ。と。轟。り。と。素。ま。う。み。一。かけ。轟。ま。ち。身。の。餘。よ。か。つ。と。圓。音。
時。は。穿。て。つ。る。嘆。悲。ち。の。怨。て。よ。く。の。妨。げ。な。き。と。そ。の。あ。立。ま。く。と。六。
石。廢。な。づ。れ。弑。ジ。陣。刀。の。経。と。れ。也。と。お。も。く。る。一。刀。と。か。う。こ。へ。外。ア。ロ。一。綱。也。と。
突。き。と。と。聲。悲。つ。と。馳。め。と。す。く。身。刀。か。ふ。之。參。へ。餘。の。隨。前。切。打。れ。禪。の。刀。と。
轟。ん。と。す。と。大。喝。一。声。笑。め。ぐ。切。付。る。き。カ。モ。高。ヶ。兜。の。吹。返。し。う。り。る。ま。ま。の。
官。の。脱。氣。ま。で。切。り。ゲ。ら。ま。く。は。る。よ。よ。た。ま。く。び。筋。も。と。あ。る。ま。く。筋。も。う。
廢。よ。う。け。て。引。あ。ざ。く。せ。る。か。ま。ち。虎。口。城。の。縁。て。一。町。だ。う。隣。は。と。ほ。東。海。
海。み。あ。ざ。じ。逃。て。い。く。此。時。よ。あ。て。お。後。の。部。伍。急。く。丸。を。も。と。甚。熱。却。も。

下知く。と近く。軍ふのぐも。遠きりへ戦ふ半ばことぞとすしく
見物してぞゐる。然つて河誠の定西途中みづけ合戦と笑とを
し。其軍と經てち面へ通と付とあと平抑よ弛とうなせば。今たゞひの
室中と。勝負へいさぎまことに。長尾と太田の旗のまへ。二夜遙かに云
假あくる。春風かや春き。万字巴のどく。サリテ禪音閣の声。ける
の聲。おびき。京まちの圍を得む。道灌も切抜けど。ゆよりれと城ふを
よ教修理を至る。西へ長途とまじへ馬み一息続げ。本陣よ急のを報と
あく。衆もすげの搭合の轍波とつづく。切のまへ。衆まへ二陣の東らを
ある。道灌と付多んとかりと役りとしと。故て多めの道灌ありませ。小跡と
つども猪木やうど。賣あぐくそそのまへ。かく二陣の大軍をりと。撲滅と
全こころゆき。氣應と進えど。道灌是と見えぬも。既次第あと。其
ゆゑゆき。進えど。道灌是と見えぬも。既次第あと。

やされ。彼等精神と励まし。まも紙生捕と英士公指揮へ而よ
ありて。かく。も尾。也。尾。也。卒。也。の。敵。の。敵。よ。四。五。路。よ。す。り。て。不。え。を
多。少。も。屬。く。擇。ら。く。也。若。兵。軍。と。そ。も。て。く。衆。も。擇。み。の。怨。を
あ。き。く。ひ。ス。き。り。の。を。う。ね。引。ひ。て。行。ひ。せ。よ。と。血。眼。よ。う。て。制。さ。と。ど。も。
逃。り。ま。ま。ふ。ま。ら。と。逃。一。合。ま。も。な。づ。か。と。備。軍。ハ。や。り。ひ。く。不。勝。失。せ
奇。ハ。衆。玉。を。が。ま。の。者。を。く。く。休。一。く。人。殺。と。あ。と。て。あ。の。小。あ。も。あ。の。よ
と。ま。き。こ。り。し。よ。乃。と。然。道。而。て。成。氏。の。ほ。と。へ。參。と。軍。の。重。を。細。よ。言。上
ゆ。で。か。と。ば。る。

○道灌威東國とおき。附王景泰方四との後没後。長は相州奥三保軍
海老名本向行元の事。

ある。小毛尾。京。も。へ。金。す。こ。なく。千葉。新。か。孝。間。と。お。屋。と。今。度。公。武

乃の軍よりとて出張を。道達傳へと金手園書ゆるべ先
陣。敵方と向けれ。一継きてよ歎定す。先勢も。まこと。考小勢
も。一継小勢をして下孫へ退陣を。素見度の軍より勝率あへば
あらう。二の官の隊より大石政房守も。始終叶ひざくやむりひづ。砲兵脇で
降となり。又相殺破き。小次うあ飯も。敵のあざる。あくまでも。行き方
かくどありふる。以下もとて道達が向へて攻せば。一継へ必勝つ。是れ
より其勢は雷霆の如く。勇名四万小轍き。従ひて其鋒先と争ひん。
する所の多く。此時より至りて扇谷の威權強大。ふぞうふき。然れども又素
小兵をある者もあらず。相殺の怪人本間近江守資連。海老名左衛門尉秀之
甲羽鶴衆の加藤弥右衛。その外相殺西郷乃も。ども一味同ひて。圓圓
三保とりよふ。相どり。由縫をありより。また田道達の軍多紙率。一式

近接山生法。と陣を立。吉井實田源八郎。吉田屋半助。二千餘騎を率く。
汝あん彼を。馳向ひ攻せよ。謀る。鳥倉蠅裏の強武者みて。せひ。糧
食三。一き。與三保。えへ。範堵。うへ。ごくん。はくあ。必ず。う。兵
さ。ベ。び。と。神。教。御。して。遣。ふ。お。又。本。間。海。老。名。加。藤。等。會。日。食
て。渾。後。しき。ふ。か。向。策。連。が。曰。道。達。村。山。ま。ぐ。裏。向。一。先。も。と。り。と。當。押。を。攻
か。と。さ。い。と。そ。ろ。よ。あ。り。居。ま。く。故。の。あ。も。る。を。待。て。隣。ぎ。あ。く。う。ん。も。隣。う。る
ふ。似。そ。く。一。半。途。生。で。ち。て。正。敵。の。絶。う。ま。よ。責。か。く。ら。ば。後。水。せ。ん。必。定。たり。
禮。如何。と。や。く。れ。ば。加。藤。弥。右。衛。が。向。參。計。策。う。と。う。ど。も。我。う。か。み。味。方。の
か。勢。と。う。て。サ。か。う。と。も。大。軍。小。圍。ま。き。う。を。難。め。な。べ。す。で。要。害。よ。う
て。堅。く。ま。う。あ。い。度。付。ス。ハ。伏。兵。復。け。て。戰。び。敵。へ。奈。内。と。か。く。ぐ。る。ゆ。ゑ。あ。勝
事。も。あ。べ。じ。そ。中。わ。い。奈。見。も。接。き。伏。向。け。と。ま。ん。卑。竟。へ。游。戦。よ。如。へ。あ。に。

とやまとみのう。衆議兩端すこゝまで一決せざ。共もとて海老名秀益進く。かく
者の中さへ如何とも理をゆ。さればうちておりよ。而後軍へ西への備え
方とそしに至る。奉圓後へ中途不歩かくたゞぐ。まかみて、勢をりてこれを
助さん。かばん後へ又強まく城を守りうとぞひづる。此依然べつて同
年十月廿四日先陣へ奉圓邊を守る資連の百餘人。二陣へ海老名左衛門尉秀
益三百餘人。遂に小貴来る。吉田へ義て人を所く。敵の動静と窺
ひ見る間早くもげ由詮進も圖書助へ源兵守ふ向ひて敵兵二もよこられて押
あるとあつ某をもとあへてたゞひと勢で二陣へ是下落と切く。一
ちのとよりふと。鬼も角も殺さんとおがはりもとや。あ陳瑞義
に達ひ。嘗て助安惠の括梗の辯を生よきよ。弓の有ふ下矢をつゝ
馬の腰を。射ぬ。手間が方生へ射ぬ少しへ。矢面よ猛牛を。士

やまと射キとさへとぞうよ。諸の蔭よ伏陽れく避くえを。大將資連
お車と車か。只遙散よ駕迎ふと。ごく真を小弛あとば足み氣が得く
す。内房士幕せふ素へきべ。吉田資連の者とたゞ引き。も柄の是腰
十八人。持て膝車よろく待居う。奉圓が務る者をひき。へふ構つぞ
馬の腰を。射せられ。るへをまく。壁に打ひて放とる。おお土墨く。彦はて。
おふ泥れ。まことえて。時々よと。資連の東配を。おねじ。従士一團よ
無う。あらか。まへておと。是ふうて奉圓が軍士七百八製。又一所よもの
つまう。資連も。おれ。逃る。嘆方ふり。立ても。被軍も。かづびり。太
田資連。おと。追ちて。寶用。大方と。うすり。されば。二陣の海老名秀益
と。合戦の世が。不て。いき。勝敗あくらま。追つ。捲く。挑と争ふ。おと。海
老名秀益が。接合する。二度と。よせて。かる。せよ。か。海老名が列伍

は模様よ実うきを乞奉一度よれもち我づるとす者もす。我先ふと
失生ぐ。ふよもりてき田。宝田一人も遁さへと退けする事一急あれど。
秀益もあくかくかへ返し。味方と助けて防戦を。幸間近に資糧もひ
合戦の我が仕出で一車きと。虎口城の邊にて街よ面を向く。まことに一發
引返し。秀益とお並んで進ひある。敵と支し。先刻よりの我ひふゆを満
むへ當り。かへ鬼神とを争ひ。也る全殊みもてんくされ。あへ共ふ
私軍の手ふ付ひ。左田兄弟の故將とてどもとて。兵士多く付ひて
勇も頗び備を堅めて。敵も堅く守り。道溝も村山
より押來る。軍の始終とまく。物始らよしとあ人を祐し。直は敵城へ攻め
至る。か藤弘ら亦我一人まで範疇をひぐ。密よ城の後より脅へて。
已が道溝河へ引ひ。城道溝を是とおが。従とおみて甲斐の傍を

越え。殊ひ序が要害か。す。此所へ山聳谷深く。巖石左右よ崎ち。そ
れより不經葉肉の城地。よし。弱の弱り。ひよ。力攻みへあり。ひよ。と
シ放火。軍主紙羽と武藏へ凱陣を。まろ。ま。

○道溝東武巡見附り小日向金剛寺。市谷八幡宮の奉。并小山吹乃
里の事

備えを道溝へ世間少時無事あをば。けあひの戰勞を慰し。就てへ在土ふ
所と巡見て。用ひの薦よせん。併くを引。具して。小石川の方へ。あ
ゆ。樹木蔭森る山の半腹。ふ葉りて。薦ふ。一つの草庵。あ。制ら。食
拉行の縁湯よ脚。仰汲も。其傍。野氣。薪。蓋あ。と拂へ。ひと殊勝
き。ふ。あ。き。道溝。庵の内。ひ。と。歎。半。仰。と。する。傍の佛。よ。む。ひ。と
坐し。垂る。道溝を見て。かへ。ありひ。け。も。かる。身。番。よ。す。り。う。ひ。と。

と席うちもひて靖トヘモ。厚茶をなまくわきめ。道津も晚春一言語
頬流津の義を述られ。其名の間つ。用ふ和尚の世の礼とせよ。避て閑居乃
解さじ。道津兼てよりも和尚の徳と教へ。一寺造立の事と給し。
後日ゆきとて精舍就く。山をあらむと。受け事と全般とり。数十口乃至
僧徒と。二六時中修行怠らず。りづくを國家の冥福をえらる。
ある日又朝の方へ出て市谷へ至る小高。高岡ある。巨木歲経りて純縛と重
塵外の地勢。僧と離れて住境すれば。道津もぐくると。ともに。不よ禪へ
左右の人よ。我より。頬鋤食の八幡宮紙にて。勤行して。擁護を務ん
と。坐りひ居る。ひまざ共に地を以て。施あ不供所と。神祇。祇座の靈場。是
て。馬上甲冑の尊影を神身と。本社拜殿をぐら瑞籬。よみがまで悉
成就し。常磐堅磐小弥榮をす。神徳と仰ぎ。東園寺と別當所。みや

さりなる。又今井の庄赤坂ふ寄園の二ノ宮。冰川明神を祀る。石の御神
自呂故の國といへる。由道津先年奉社奉納の和歌をもあらまこと。残
化雪とり。歌題。そ。

老らくの身とつて。アキシム。サム。アマリ。カド。アル。モ。キ
と。孫も。すり。も。あ。げ。り。も。社奉幣。の。く。そ。飯。ら。き。く。る。道。津。有。る。
時。城。も。う。だ。な。る。高。田。高。城。も。狩。り。な。る。其。首。へ。獲。物。も。若。平。り。て。大。ふ。興。り
ゆ。ゆ。く。是。よ。う。尚。関。口。の。方。と。獵。ん。と。て。凶。物。の。り。少。く。具。と。て。根。河。系。へ
ゆ。ゆ。き。る。刈。率。の。車。競。い。す。み。て。東。西。へ。走。り。あ。小。く。別。見。叢。子。隱。き。る。
麻。猪。伏。く。ま。と。道。津。も。笑。盡。ふ。へ。て。る。と。て。見。ゆ。と。さ。う。る。小。活。生。の。う。
乃。モ。風。さ。む。だ。の。雲。く。こ。る。う。ち。よ。東。風。一。通。づ。う。ち。通。て。雨。そ。れ。く。と。晴。り。る。
え。す。く。家。も。す。く。れ。て。古。袖。ま。よ。漫。だ。て。あ。ず。の。家。の。あ。り。な。と。ば。あ。う。く。よ

あらそと。一人門ふきあひとある内へ。道入道のれ候せんとて出でたが。かる村
あらあらかひぬ御度の事。其わいと雨具とまくせり。こ声ふくをナリ。
かわて、駆ち。十四ぞうなよる女。のまく。夜へ坂つまくをど。すま
しゆるみどりのまく。まやまもうじく。お居あるまひもさすが被へとも
見えづら。と駆りかる。吹のふをゆきまで。候。まざれまふ。枝とぬけで。
駆みてぞさへ。なが顔うちまむりて。かむらげあ。道達城下の。音
甚しき。病金と。此所と。をとべ。おも既小暮と。日影す。殊よ暮れなり。
終日おこし。尋ねて。頃。ひづる。ふるみても。今日の。様。よぎ。ゆかく
多。中村佐助が。肺重類。家家の。人。すうなる。ことと。宿る。小重。おまき
感。お歎く止だ。道達共。やを。向へ。まわが。古。かか。

七重八重花の。受けども。おも。まうれ。みの。心。と。うづふ。うま。かま。一束

とあら。雨具。うへて。たゞ。あら。り。や。も。おりて。ぶ。で。あら。と。ざ。れ。ば。蓑。一
さ。小。縫。う。さ。ご。び。と。け。た。一。枝。よ。あ。の。か。く。じ。と。て。か。く。ま。あ。う。を。
を。も。尋。常。の。く。す。せ。び。い。そ。で。か。く。ひ。ぎ。と。入。道。の。く。と。あ。つ。て。の。う。ざ。れ.
な。ぐ。そ。よ。い。あ。る。り。那。く。世。ふ。く。も。く。め。や。わ。く。か。も。又。く。か。く。一
き。く。女。み。く。わ。く。よ。こ。や。き。れ。ば。道。達。も。殊。よ。感。い。ぐ。と。そ。

按。ごふ世の常詩。よ。お。道。達。の。因。は。獵。して。あ。あ。み。あ。い。る。貧。家。り
ま。す。て。雨。具。借。ん。と。り。い。く。ふ。き。ま。女。の。よ。く。の。と。と。打。つ。と。知。す。道。達。と
娘。あ。與。く。る。者。も。ま。え。と。か。く。と。げ。見。女。子。囁。あ。う。が。と。ね。へ。狩。へ。あ。る。が。く。
あ。再。く。く。あ。く。後。中。村。ま。れ。よ。借。る。ふ。ち。あ。と。り。て。あ。き。な。ま。く。と。い。い
タ。ま。く。と。み。ふ。感。ト。道。海。よ。向。じ。て。き。え。武。小。か。く。べ。鬼。神。不。測。の。妙。と。ひ。の。い
し。こ。ど。も。ま。た。不。和。お。の。徳。ハ。あ。う。き。り。を。却。て。け。小。か。み。も。劣。す。ま。と。す。も。



是非あくとて歎息しきと。道灌ふく悲愧し。とぞうまむかひて
哥と學び。絶よ名す。あすこ極くやくと。とも並び人間の贈矣する。す。
さもど道灌の初祖より勤め。高き才。十一葉の頃に詩文等の作あり。殊々
父の道真入道へ哥へ。なる。ともかくあよ落の時。勅旨の傳わ。その外
細川勝元へ。極て遣り。厚き。人の多く。かむ。まよす。豪傑食せ。也。
道灌の家集へ碧玉敷起。又暮景集など。おほく。けし。秋の古文。

後拾遺集下

小糸の家よ往けり。あじて。あらゆる。自らの。かる人の。ゆうなまへ
ふるみ。めだた。ある。努め。うなづく。もと。もと。は。のり
まもも。えれ。日ひの。うろを。え。りよ。ま。ひ。み。か。と。て
け。う。る。ゆ。る。ゆ。る。ふ。り。ひ。う。そ。ー。き。ま。

斐明親王

七言八音。たゞさけども。山伏を。もと。もと。もと。もと。もと。もと。ぞ。かほ。き
と。を。か。と。あ。と。道灌。ゆ。あ。小。彼。御。の。女。ア。山。吹。の。技。を。あ。と。あ。ふ。や。
又。是。と。道灌。小。附。會。と。と。山。吹。の。あ。ア。山。吹。を。ア。と。と。て。後の。人。比。得。の。傳。
う。ふ。や。御。を。う。べ。今。山。吹。の。重。内。向。徳。へ。國。は。う。難。手。が。や。あ。る。あ。る。
向。徳。四。上。水。の。側。不。ゆ。る。

